

■発行：一般財団法人熊本市国際交流振興事業団
 〒860-0806 熊本市中央区花畑町4-18 熊本市国際交流会館
 ■Publisher: Kumamoto International Foundation (KIF)
 4-18 Hanabata-Cho, Chuou-Ku, Kumamoto-Shi, 860-0806
 TEL:096-359-2121/ FAX:096-359-5783
 e-mail: pj-info@kumamoto-if.or.jp URL:https://www.kumamoto-if.or.jp/



多文化共生シンポジウム「外国人住民と地域の共生を考える」 ～ポストコロナ時代を見据えて～

「多文化共生」との言葉をよく耳にします。総務省多文化共生推進プランでは「多文化共生」を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義しています。地域における多文化共生を推進することは、「外国人住民の受入れ主体としての地域」「外国人住民の人権保障」「地域の活性化」「住民の異文化理解力の向上」等の意義を有しており、重要性を増している、考えられます。

新型コロナウイルス感染症拡大以前は熊本市にも大変多くの外国人旅行者や、技能実習生を見かけ、外国人住民数も増加する一方でした。現在は国際的な人流が止まっている状況ですがこれは一時的な状態と考えられます。

違いを学び、違いを認め、全ての人が安心して生活できる「多文化共生社会」の実現を目指し、熊本市国際交流振興事業団では毎年2月を「多文化共生月間」と位置づけ、多文化共生に関するパネル展示や、「多文化共生シンポジウム」を開催しています。新型コロナウイルス感染症の影響で外国人の受入れが停滞している今こそ、外国人材を受け入れる側である私達日本人や、地域に求められる取組などを考える良い機会と捉え、「外国人住民と地域の共生を考える」～ポストコロナ時代を見据えて～をテーマに多文化共生シンポジウムを令和4年2月26日（土）に開催しました。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、会場での参加、ZOOMを活用したオンライン参加が選べるハイブリッド方式で開催し、会場・オンライン併せて92名の方にご参加をいただきました。

移民政策や多文化共生社会推進について多くの著書を出されており、政府有識者会議などのメンバーを務められている毛受敏浩氏（（公財）日本国際協力センター執行理事）による基調講演と熊本県外国人サポートセンター、天草市外国人総合相談窓口、熊本市外国人総合相談プラザに寄せられている相談内容から見てくる外国人住民を受け入れる側に求められる取組を考える事例紹介の2部構成で開催しました。以下はシンポジウムの報告です。

基調講演

「人口激減時代を迎えて～多文化共生と日本の未来～」と題した基調講演では、現在日本が置かれている人口激減時代の状況を知り、今後も増加することが予想される外国人住民との共生、どのように社会を構築していくべきかご提案いただきました。

以下は基調講演の概略です。

【日本の未来を考える-日本の人口減少は避けて通れない】
 現在日本は人口激減時代に入っていますがまだまだ入口段

階にあります。新型コロナが少子化に拍車をかけている現実があり、2048年には日本の総人口は1億人を切る予測もあります。今から30年弱で現在の九州・四国・北海道の総人口がいなくなるのと同じ数字です。特に少子高齢化が顕著で、現在でも毎年400校以上の公立小中学校が廃校となっており、この傾向は今後も拡大傾向にあると考えます。今後50年程度は人口減少が続くと思われ、また外国人を積極的に受入れしても人口減少を止めるまでにはなりません。

《特集》多文化共生シンポジウム「外国人住民と地域の共生を考える」
 …… P1～4

《事業報告》世界をよく知るセミナー …… P5

目次

Contents

ちょっと言わせてはいよ ～
 韓国国際交流員 李 英洙（イ ヨンス）さん
 …… P6

世界を知る 青年海外協力隊OG 溝口 希実さん
 …… P7

ちょっと日本語/きふプロ/令和4年度賛助会員募集
 …… P8

特集：多文化共生シンポジウム「外国人住民と地域の共生を考える」

日本政府が100万人単位で移民受け入れを行うとは考えられず、また、日本へ移民を希望する外国人もそこまで多いとは考えられません。女性の年齢別人口で見ても今後は出産適齢期（20～39）の女性の人口は減少する為、出生率を上げて人口増加に転じることはなく、結果、日本の人口減少は止まらないと考えられます。

小泉内閣で掲げられた地方創生も、元々は人口減少のスピードに歯止めをかけるのが目的でした。様々な施策を実施した結果、一時的に出生率は増加しましたが、その後は減少傾向が続いています。現在の政府の骨太の方針から「人口1億人維持」の文言がなくなりました。

【人口減少を補う外国人住民の増加】

平成28年から平成30年で人口が増えたのは1都5県のみ。他の道府県は人口が減少しています。

日本の人口を考える場合、人口減少が進むことを前提に物事を考える必要があります。2019年のデータで、日本人は約51万人減少し、外国人は約20万人増加しています。日本人人口減少数の約4割を、外国人の増加で補っていました。今後も日本人人口が減少する傾向は変わりません。外国人数は現時点では新型コロナウイルス感染症の影響で新規入国ができない状況ですが、今後も日本社会が必要として呼び寄せている状況は変わらず、外国人労働者を確保することは企業にとっても死活問題となっています。技能実習生や（就労目的の）留学生など様々な在留資格を持つ外国人労働者を日本社会が必要としている現状が変わらない限り労働力としての外国人の増加は続くと思われ。熊本も全国と同じ状況で、日本人の人口減少を、増加する外国人が補っています。

【現状の外国人受入制度の問題点】

現状の“定住を前提としない外国人受入れ”の場合、企業からみると一時的な労働者の受入であり、技能実習生や出稼ぎ留学生に依存した低賃金産業の拡大にしかつながらない現状です。この現状は日本企業のイノベーションになりません。技能実習生の受入にも上限がないのも

問題です。現在、19道県における在留資格別では技能実習生が一番多く、熊本県も技能実習生に依存する産業形態になっています。

【外国ルーツ青少年の増加と課題】

外国ルーツの青少年数も増加しており、課題も出てきました。小中学校教育を受ける年齢の外国籍児童の数は年々増加し、2019年には12万4千人に上ります。外国籍児童は義務教育対象ではありませんが、不就学の外国籍児童数は約2万人。高校中退率は日本人平均の



7倍というデータもあります。

日本語教育支援もボランティアが中心で、ボランティア主導の日本語教育では日本語能力向上にも違いが出てしまいます。日本語能力が向上しないと卒業後もよい職業につくのは難しい現状です。

【外国人住民への日本語教育】

文化庁は日本語教育の充実に努めていますが今後は国として全面的に関与していくことが必要と考えています。定住を希望する外国人住民に対しては高い日本語能力をつけさせるためにも、国の積極的な関与が必要です。2019年に施行された日本語教育推進法では日本語教育を提供するのは国の責務になっています。

【新型コロナ下での外国人の現状】

新型コロナの影響で新規入国する外国人数は大幅に減少しています。

2020年（2019年比）在留資格別でみると、技能実習生 19,705人（前年比-55.1%）技能実習生 74,802人（-55.3%）、留学生 49,748人（-59.1%）。対照的に在留外国人数はあまり減少していません。理由としては、2020年6月現在 288万5904人（-1.6%）新型コロナの影響で、帰国できない状況でもあるかと思われ、労働力としても必要とされており、企業も現在いる外国人労働者を必要としている現状もあります。

【外国人についての国民の意識について】

ここに外国人に関する3つのアンケートを挙げてみます。

1、読売新聞 2019年3月全国アンケート
在留外国人の増加は良いことか？
良いこと・どちらかといえば良いことだと思う 71%
悪いことだと思う 27%

2、新宿区多文化共生実態調査 2015年（人口32万、外国人比率 11%）

近所に外国人が住むことは？
好ましい・どちらかといえば好ましい 22.1%
好ましくない・どちらかといえば好ましくない 16.9%（好ましくない 4.4%）
どちらとも言えない 55.3%

3、岡山県総社市多文化共生推進施策に関する意識調査 2016年（人口6.8万、外国人比率 1.2%）

外国人が増えることは？
賛成・やや賛成22.8%
反対・やや反対 12.6%（反対5.2%）
どちらとも言えない 64.6%

以上のように外国人比率に関わらず、外国人が増えることに対して肯定的なイメージを持っていることがわかります。

また、外国人が多いと犯罪増加や治安の悪化などが心配事としてありそうですが、外国人比率が高い新宿区の調査では、外国人が増えて一番心配されていることは「ごみの出し方」です。二番目は騒音の問題。

よく言われる外国人犯罪増加を心配している住民は少ないという結果となっています。

日本人の意識の中で、治安に関する心配はそれほどされていない、ということです。

【考えられる外国人受入れ—2つのシナリオ】

また、外国人を受け入れる際の成功と失敗の2つのシナリオが考えられます。

1. 失敗するケース

・一時的な滞在の想定で日本語能力、就労能力の低い外国人が定着する。

- ・企業は低賃金労働に依存しイノベーションを怠る
- ・日本語能力の改善が進まず、ダブルリミテッド世代が拡大する。

2. 成功するケース

- ・日本語、能力ともに高い外国人の受け入れは企業での生産性の向上、地域社会への貢献が拡大する。
- ・日本人への刺激、相乗効果による「多文化パワー」が発揮される。
- ・社会、企業の持続性が向上する。

このように日本を「自分の国」として捉え、地域社会に貢献したい外国人住民を増やす取組が重要とされます。

【未来への提言】

日本の歴史から振り返れば海外からの文化（異文化・渡来人）を受け入れ、吸収し、イノベーションを起こしてきました。日本の発展には異文化を受け入れ、取り入れる必要があります。この日本の歴史の中で考えると、「移民」を受入れることは特異なことではないかもしれませんが、外国人の潜在力を開花させる視点を持ち、日本人と外国人の相互啓発・成長を促し、ウインウインの関係づくりができるよう、日本の将来像について国民的な議論が必要と考えます。

【外国人に社会を支える人材として活躍してもらうには】

「人口減少下で外国人住民は欠かせない存在であり、彼らを新たな仲間として迎え、地域社会の発展を目指す」「国、自治体、地域が仲間として受け入れる」との明確なメッセージを出すことが重要と考えます。外国人住民に対しても地域として受け入れることの意味表示（メッセージ）が重要です。

また、外国人住民への対応（日本語、子どもの教育、労働、医療等）だけでなく、日本人住民の意識改革、「心のグローバル化」を進める必要があります。外国人への偏見・差別意識を取り払い、地域社会と一緒に支えるパートナーと認識し、受け入れる体制づくりこそが「多文化共生社会」構築への第1歩です。外国人住民が日本語を学ぶことも重要ですが、日本人住民からの歩みより、地域で「やさしい日本語」を使うことで相互理解が進み、多文化共生も進んでいくと考えます。

【外国人支援・活躍のためのプラットフォーム（協議会）】

自治体、国際交流協会、地域日本語教室、NPO、企業（経済団体）、教育機関、社会福祉協議会、子ども食堂、法テラスその他専門機関が連携協力し、外国人支援を検討するプラットフォーム設立を熊本でも是非検討してみてください。様々な立場の専門家が集まり、今後の外国人受入れ、支援、活躍を検討し、地域へ提案できる体制づくりが望めます。コミュニティと日本人をつなぐネットワークのハブとしての熊本市外国人総合相談プラザの役割があります。



毛受 敏浩（めんじゅ としひろ）氏
公益財団法人日本国際交流センター執行理事

兵庫県庁で10年間の勤務の後、1988年より同センターに勤務。内閣官房地域魅力創造有識者会議委員、文化庁文化審議会（日本語小委員会）委員、新宿区多文化共生まちづくり会議会長、慶応大学非常勤講師などを歴任。近著に『移民が導く日本の未来』。文藝春秋2018年11月号「亡国の移民政策」座談会が年間読者賞となる。

～外国人相談から見える地域（受入れ側）に求められる取組～

後半は熊本県内で外国人相談対応を行っている、熊本県外国人サポートセンター・コーディネーター阿南栄子氏、天草市外国人総合相談窓口相談員の俣野智子氏、野崎知美氏、熊本市外国人総合相談プラザ・コーディネーター田辺寿一郎氏から外国人住民から寄せられる相談事例紹介をいただき、私達、外国人住民を受け入れる側に必要な取組を考えました。

【以下事例報告の抜粋】

「熊本県外国人サポートセンター」

熊本県外国人サポートセンター・阿南コーディネーターからは相談の特徴として、熊本県では食品加工・農業分野等の技能実習生が増加している為、技能実習生からの相談が多い現状報告がありました。相談方法としてはSNSやメールが多く、言葉の問題の為か、電話での相談は少ない傾向にあります。

【相談対応で感じること】

相談対応を通して感じることは、日本人住民が「やさしい日本語」を積極的に活用することが重要であり、外国人住民を地域の住民として捉え、見過ごさず相談窓口へ繋ぐこと、外国人住民が気軽に相談できる環境づくりなどが必要だと感じています。



「天草市外国人総合相談窓口」

天草市外国人総合相談窓口の俣野相談員、野崎相談員からは、広大な天草地域（100平方キロメートル・熊本市域の2倍）の中に散住する外国人住民が抱える問題の事例発表がありました。ここでの問題には下記のとおり地方ならではの特徴があります。

- ①交通不便地域のため車がないと移動できない
- ②専門機関や専門職が存在しない（少ない）ため、相談解決に繋がられない
- ③コミュニティがかなり小さいためにプライバシーが守られない

【相談対応で感じること】

外国人散在地域だからこそ、外国人相談窓口が必要であり、重要だと考えます。

外国人散在地域でも外国人相談窓口のニーズがあり、深刻な事例があるため、専門機関との連携が重要です。相談体制を充実させることは、外国人住民、日本人住民にとっても暮らしやすい地域になることだと考えます。

「熊本市外国人総合相談プラザ」

熊本市外国人総合相談プラザの田辺コーディネーターから熊本市に住む外国人住民の相談事例紹介がありました。熊本市外国人総合相談プラザには、月平均90件～100件の相談があります。在留資格、仕事、住宅関連、教育、出産・子育て、翻訳・通訳、行政手続等、多岐に渡る相談があり、新型コロナ関連相談も多く、2021年だけで約100件程度あります。

【相談対応で感じること】

相談対応で感じたことは、「外国人住民の日本語レベルの向上が必要」ということです。

公的機関からの文書・書類（税金、年金関連書類、その他の行政関連書類）の理解が出来ないという相談や、熊本で就職希望を持つ外国人で学歴、能力があるにもかかわらず、企業が求める日本語能力と開きがあり、就職に結びつかない現実があります。

また、日本人の外国人住民に対する偏見や無知からくるトラブルや、外国人住民が持つ文化背景への理解不足に起因する相談も多く見受けられます。

今後の多文化共生社会構築を考えると、相互に異なる文化や価値観を持つ人々が互いに学び合うことで、自分の視野や価値観を広げる機会になると考えます。

日本語学習支援、異文化理解と多文化啓発、外国人コミュニティと日本人をつなぐネットワークのHUB（拠点）としての熊本市外国人総合相談プラザの役割があると思います。

「まとめ」

人口激減時代に入った日本が抱える外国人受入れの問題点、外国人住民が増加する現状の中、外国人住民を地域の一員として捉え、活躍できる地域になるために私達日本人が外国人住民へ明確なメッセージを発することの重要性を考えさせられました。受け入れる日本人側が違いを学び、外国人住民への偏見・差別意識をなくす「心のグローバル化」が、外国人住民と共に生き、地域の人材として共に活躍していく上でも最も重要な点であることを再認識することが出来た基調講演でした。また、熊本県内で外国人相談窓口対応という多文化共生社会に必要な最前線で活躍されている4人の方から相談事例紹介と、相談対応から感じる外国人住民を受け入れるために必要なことを示唆していただきました。

3月19日から「第38回全国都市緑化くまもとフェア」が始まり、熊本市内の各地の会場で花や緑をテーマとした展示が行われています。熊本市国際交流会館内にも、週替わりで生け花、押し花、花の水彩画等様々な形で花とみどりの魅力が5月22日まで紹介されます。

そのような中、4月20日～24日、27日～5月1日は「海外Week」として熊本市の交流都市であるフランス・エクサンプロヴァンス市、姉妹都市であるアメリカ・サンアントニオ市の紹介を花畑広場にて開催しました。それに先立ち3月17日に「世界をよく知るセミナー」として「フランス庭園の特徴と魅力」と題してフランス在住の庭園文化研究家の遠藤浩子氏にフランスからオンラインで繋ぎ、講演をしていただきました。以下は、その講演の様子を報告したものです。

皆さんはフランス庭園と聞くと何を思い浮かべますか？特徴としては直線的に伸びた歩道、大きな池や噴水、そして様々な形に刈り込まれた木々などが挙げられると思います。

そんなフランス庭園を説明するにはいくつかキーワードが挙げられます。

ビスタ (vista)・・・基本的に左右対称となる公園の軸線ともなる直線

パルテール (parterre)・・・宮殿の近くの花壇。ツゲなどの木を低く刈り込んで、幾何学的な模様を作られたもの。

トピアリー (topiary)・・・自然な形ではなく○や△、□、渦巻き状など綺麗な刈り込まれた形を作られた樹木、生垣。

彫刻 (Sculpture)・・・ギリシア・ローマ神話の登場人物やテーマに即したものが飾られます。

ボスケ (bosquet)・・・目隠しともなる密集した木立。特にビスタの両側に樹木を並べて樹木の壁を作ることもあります。

ヨーロッパにおける庭園の流れの中でフランス庭園の歴史は、その前身となるイタリア・ルネサンス期に発展したテラス式の影響を受けて17世紀から18世紀にかけて発達しました。その後、

自然の風景を取り入れた庭園へと変化していきますが、その様式が再びフランス庭園へと影響を与えるといったように庭園の歴史の流れは一方的なものではなく、前後との繋がりがあります。



ベルサイユ宮殿の庭園

フランス式庭園の代表的なものは「ヴェルサイユ庭園」が挙げられます。ルイ14世が40年近くの年月をかけて作った庭で800haの広さが残っています。中心軸の通った左右対称で広く遠くまで広がる様子が伺えます。日本の庭園とは違って左右対称、幾何学的な模様や、直線的な作りという特徴が見られます。これは、当時の人々の美意識の中で「自然を人間と対峙するもの」として取らえており、人間の力でどこまで自然をコント

ロールできるかを挑戦していたからです。自然に対して、どこまで人間の手を加えていけるかという時代でした。また、自然本来の形より直線、円形、球体のような幾何学的な形が完璧な美として認識されていました。

ヴェルサイユ宮殿の中にはいくつかの庭園があり、地元住民の方々の憩いの場となっています。週末には地元の人がピクニックを楽しむ姿も見られます。

そんなフランス庭園も18世紀のマリーアントワネット



ヴァンドーム美術館

の頃になると「自然回帰」の思想が影響を及ぼし、その特徴が見られるようになります。しかし、その頃の「自然」を取り入れるところは部分的なもので、まだ、演出さ

れている部分が多いものでした。

今回の海外weekでも紹介したフランスのエクサンプロヴァンス市にもこのフランス式庭園が見られる場所がいくつかあります。まずは市内の中心部にある「ヴァンドーム美術館」です。この建物はかつての司法総督が別荘として作らせた建物で、トピアリーや噴水、直線的なアプローチなど、フランス式の庭園なのですが、同時にイタリアのルネサンス式庭園の影響が見られます。特徴としては庭が階段状になったテラス式がみられます。エクサンプロヴァンス市にはその他にもたくさんの美しい庭園があります。

フランス式庭園の特徴として、パルテールでは花を楽しむこともありますが、ほとんどは緑で、作りを楽しむような庭園です。日本とは違う庭園の魅力を楽しんでみてはいかがでしょうか。



講師：遠藤浩子氏

フランス在住庭園文化研究者。ペイザジスト

フランス在住、庭園文化研究者。東京出身。慶應義塾大学卒業後、エコール・デュ・ルーヴルで美術史を学ぶ。長年の美術展プロデュース業の後、庭園の世界に魅せられてヴェルサイユ国立高等造園学校及びパリ第一大学歴史文化財庭園修士コースを修了。

2016年4月から6年間にわたり熊本市で韓国国際交流員として活動された李 英洙さんが任期満了となり熊本を離れられました。異文化カフェをはじめとして様々な国際交流事業に携わっていただきました。



熊本市韓国国際交流員
李英洙さん

アンニョンハセヨ。熊本市韓国国際交流員の李 英洙 (イ・ヨンス) です。2016年の春、見知らぬ都市での新しい暮らしや国際交流員になったというときめきに満ち溢れていた私は、この紙面で初めて皆様

にご挨拶させていただきます。それから早6年が経ち、ここで最後のご挨拶をすることになりました。歳月が経つのが早いことを、今までの人生で一番実感したのが熊本での6年でした。

熊本地震から始まって...

熊本地震から始まって...

2016年4月13日、空港からのリムジンバスを通町筋で降りると、まるで初夏のように蒸し暑い空気が全身を包み込み、九州に来たことを実感しました。市役所に行って新規韓国国際交流員として正式に挨拶した後、国際交流会館に行くと、ホームステイ先のホストの方が温かく迎えてくれました。ステイ先に向かう車の中で、熊本について色々なお話を聞かせていただきましたが、未だに忘れられない一言があります。「熊本はこれまで大きな地震や台風がほとんどなかった安全で住みやすい場所ですよ。」今、振り返ってみると、まるで、どんでん返しのあるドラマのセリフのようでした。正式に出勤を開始した次の日、歓迎会が終わった後、帰りのバスの中で「前震」に会ってしまったのです！それから、28時間後には「本震」。被災地となった熊本でのスタートは、暮らしの面でも、業務の面でも、落ち着くまで、かなりの時間がかかりました。しかし、これまで大きい災害を経験していないのは、私だけでなく、ホストファミリーも市役所や国際交流会館の職員達も同じでした。そんな中で、みんな落ち着いて取り組んでいく様子を見るうちに、むしろ速いスピードで熊本の生活に慣れることが出来たと思います。

国際交流員としての活動

国際交流員の主な仕事は、行政文書の翻訳・通訳、友好協力都市の蔚山広域市関係業務、学校訪問、国際交流会館で行われるインターナショナルカフェの韓国カフェ・CIRカフェ・キッズカフェと韓国相談、それから、ラジオ出演や防災訓練の参加など、いわゆる「韓国文化や韓国語が必要な領域のことを日本語で紹介することetc.」と説明できるかと思います。しかし一方では熊本、ひいては日本の魅力を韓国の人に伝える機会も少なくありませんでした。

震災で慌ただしい状況の中でも、少しずつ活気を取り戻すと、通常通りの交流員業務で忙しくなり、猫の手も借りたい日々が続きました。でも、地方自治体の国際化を目指している熊本市にとって、私の「多忙」＝「韓国は欠かせない相手国」という意味にもなるので、それは、逆に「嬉

しい悲鳴」でした。

特に、コロナの前までは、蔚山広域市との交流はもちろん、韓国への出張や韓国からの訪問団の受け入れなど、韓国との交流が盛んに行われて、防災分野を始めとする熊本の色々な分野への視察目的の訪問団の受け入れが多く、「政令指定都市」としての熊本市の行政・福祉・環境・交通など、多様な分野について勉強ができたことは、国際交流員ならではの貴重な経験だったと思います。

交流員の業務は、どれも大事な業務ばかりですが、私が一番好きな時間は、市民の方と触れ合える「インターナショナルカフェ」や「学校訪問」でした。母国の文化・社会・言葉はもちろん、子供の遊びまで、毎回違う分野について紹介する



学校訪問の様子

ために、日ごろから韓国の最新情報を把握しておいたり、テーマによっては、もっと勉強したりしないといけません。特に、主に小学校で韓国文化紹介を行う「学校訪問」では、生徒さんにとって、私が人生で最初に会う韓国人もかもしれないので、その特別な出会いにワクワクしながら、学校へ向かいました。「韓国カフェ」では、韓国文化を紹介する立場だけではなく、参加者の皆さんの韓国文化・言葉への興味を通して、モチベーションアップができ、さらには、熊本生活全般に良い影響をもたらしてくれました。

熊本への思い出

実は、国際交流員になる約5年前に私は熊本市に来たことがあります。その時は阿蘇観光が目的だったので、帰りに熊本城に立ち寄った数時間の短い日程でしたが、お城の中で偶然くまモンに出会ったり、通町筋を通る市電を見て喜んだりしていた記憶は未だに鮮明に残っています。数年後、通町筋を歩きながら毎日出勤したり、くまモンと一緒に韓国で熊本をPRしたりすることになるとは、その時は想像すらできませんでした。阿蘇の風景に魅了され、感激しながらも熊本市についてはほとんど知らなかった私が、熊本について自信をもって紹介できるようになったのは、業務だけではなく、訪れたすべての所が国際交流員の私に勉強になったからだと思います。そして、そのすべての時間は大切な人生の1ページになりました。帰国を控えている今、6年前の私へ届けます。“熊本で良かったよ！”

熊本市の国際交流員としての6年をいつも温かく見守って頂いた皆様のおかげで、これまで元気に頑張ることが出来たと思います。お一方お一方に直接ご挨拶できませんが、この紙面を借りて御礼申し上げます。「여러분, 정말 감사했어요! (皆様, どうもありがとうございました!)」



世界を知る

このページでは、「世界を知る」をテーマにJICA（独立行政法人国際協力機構）デスク熊本や、国際交流・協力分野で活躍している皆様のご協力を得て、日本で生活する私たちには日常知ることができない興味深い世界の状況を紹介します。

「たくましいラオスの人々」

青年海外協力隊 2019年度3次隊 溝口 希実（みぞぐち のぞみ）さん
（2019年12月～2022年12月 ラオス派遣 職種：養殖）

青年海外協力隊として2019年12月からラオスに養殖隊員として派遣され、昨年12月に帰国しました溝口希実と申します。ルアンパバーンという都市で養殖や池の水質改善の活動をしました。2回目の参加で、以前は2011～2013年にフィリピン隊員でした。どちらも東南アジアにあります。キリスト教の島国フィリピンと仏教の内陸国ラオスでは違いを感じるものがたくさんありました。ラオスは中国、タイ、ベトナム、ミャンマー、カンボジアとの国境を有しています。最初に赴任した2019年12月から約1か月はラオス首都での語学研修等を受けて、2020年1月に配属先に赴任したときには既に中国で新種のウイルスが発見されたとの報道があり、雲行きがあやしくなっていました。私が赴任したルアンパバーンは世界遺産の都市で、首都のビエンチャンからは約300km北にあり、さらに300kmほど北上すると中国国境と接した経済特区が設けられています。2月の旧正月にはルアンパバーンでも中国人観光客や中国ナンバーの車を多く見かけました。ラオス政府のコロナウイルスへの対応が早急だったこともあり、当初の感染者は国内全体で40名程度に抑えられていました。しかしその後、世界的な感染拡大により2020年3月には全世界の協力隊員が一斉帰国になったことで、私も一時帰国となりました。

せっかく赴任したのにとネガティブな感情もありましたが、以前からテロや情勢不安等で帰国や任国の変更といった話を聞いたことがあったので、途上国へ行くことはそのようリスクもあると納得せざるを得ませんでした。一時帰国中に2020年7月の県南豪雨災害があり、その際に家族や友人の側にいることができて良かったです。待機期間中に県内の高校生に講演する機会も頂き、改めてラオスや途上国を理解することや、国際協力について伝えることを勉強できた良い経験になりました。その後状況が落ち着いてきたこともあり、2021年12月から1年の任期を残して再派遣されることが決まりました。ちょうど1年ということもあり、コロナ禍にあっても季節やイベントを大事に過ごすことを心掛けました。

ラオスは4月に正月があります。1月1日の西洋歴の正月は一応、お祝いし、中華系も多いので2月の旧正月も祝い、少数民族の中でもルアンパバーンには多くいるモン族

の正月を11月に祝います。しかし4月のお正月が最も盛大でタイでは水かけ祭りという名称で有名なようで、タイと文化的に近いラオスも同じく正装をしてお寺に行き仏像に水をかけます。そして通りを歩いていると皆から水をかけられます。



4月のお正月の様子

通常は多くの観光客が訪れていたようですが、私が参加した年は外国人が珍しかったようで、見つかると地元の人にバケツ等で水をかけられました。

一方、ラオスの首都ビエンチャンはメコン川を挟んで対岸のタイが見える位置にあるので、4月のお正月時期には各地の国境で行き来が盛んになります。その中で、密入国の帰国者が原因の感染爆発があり、それまでの数えるほどの感染者から一気に1日数百人を記録する日が続きました。一連の騒動で密入国者の逮捕のニュースがあったり、当人のSNSが炎上したりと陸続きの国はそんなことが起こるのだなと思いました。

ラオスは東南アジア最後の秘境とも言われますが、中国の「一帯一路」構想に関連して今までなかったダムや高速道路、鉄道が近年急ピッチで造られています。鉄道は中国の昆明からラオスのビエンチャンまでをつなぎ、ルアンパバーンを含めた途中の主要都市にも停まるので、今後の経済発展が期待されています。インフラ整備についてはタイやベトナム、中でも中国には大きく依存しています。ラオスは歴史的な背景からそれぞれの隣国には複雑な思いもあるようですが、それらの国との経済的なつながりも大きいです。ラオスの人々は近代化に積極的で、高速道路や鉄道が完成した際には多くの人々がそこへ行き写真を撮ってSNSに上げているのをよく目にしました。開発がもたらす利便性の向上は大きいですが自然環境にも当然影響があり、メ



外来種の確保・調査

コン川やその支流でもともと生息していない魚が定着しているのを目にするようになりました。養殖される魚は外来種が多く、生命力が強いため自然に放たれると在来種を脅かす存在になります。メコン川の生物はまだ生態が解明されていない種類も多く、在来種や外来種の区別もないままにラオスの人々が市場に並ぶ魚を全部メコン川の魚だと思っているのが少し悲しくなりました。近年ラオスは水質、大気、土壌の環境基準等も設けて近代化を進めています。ルアンパバーンも世界遺産の都市として発展や存続のために、コロナ禍にあっても人々が強く生き一緒に活動ができて良い経験になりました。

JICAデスク熊本について

JICA海外ボランティア（青年海外協力隊、シニア海外協力隊）や国際協力に興味がある方はJICAデスク熊本までお問い合わせ下さい
熊本市国際交流会館2階
午前9時～午後6時（日曜、月曜休み）
TEL：096-359-2130
E-mail：jica-desk.kumamotoshi@jica.go.jp



NPO法人日本語サポートあさ

代表 小川 ひろみ さん

コロナ禍の日本語教育現場

長く続くコロナ禍の中で日本語教育現場も大きな影響を受けたことは言うまでもありません。日本語学校においてはコロナ休校中の在校生や入国制限による待機学生を対象にオンライン授業でなんとか学びを維持してきました。やむを得ない状況下で始まったオンライン授業では教師も学生も右往左往しながらも、一気に教材も指導法も変化を余儀なくされました。手探りの遠隔授業ではありながら、休校中や入国制限の待機中によく学び試験でよい結果を残すことができた学生もいました。しかし周囲に日本語話者のいない状況下での自学や、テストでは測れないコミュニケーション上の課題も同時に見えてきました。

文化庁は令和3年度補正予算にオンライン日本語教育支援を盛り込みました。コロナ終息後もこの新しい流れが新たな日本語教育の方法になっていくことは間違いありません。コロナ禍で日本語教育現場での新しい時代が始まったように思います。

きふブロ インターシッピング生、サポートセンターボランティアの皆さんが綴るKIFのアクティビティ インターネットではもっとたくさん紹介しています。
http://blog.goo.ne.jp/kifblo

2022年2月17日のブログより

こんにちは！熊本県立大学の東です 本日はインターン活動2日目でした。

午前中は市内の小学校へのお出前講座の見学、午後はCIRカフェに参加させていただきました。

小学校へのお出前講座では通常は講師と一緒に掛けるのですが、コロナの影響でオンラインでの開催となりました。韓国・ドイツ・タイ・アメリカの小学校について、それぞれの国の出身の方や、現在住まれている方にお話をさせていただきました。日本とは違う教育制度が多くあり、驚くこともたくさんありましたが、特に、ドイツでは小学4年生の時には、進学や将来について考えていなければならないということに驚きました。

また、午後で開催された「CIRカフェ」では、アメリカ・ドイツ・韓国の多文化共生について学び、各国の多文化共生についての歴史的な背景や政策などを知ることができました。国籍、生活してきた環境や年齢などによって、多文化共生について様々な意見を持っていて、様々な問題があることにも気づくことができました。これを機に、日本の多文化共生のための活動についても調べてみようと思います。

(東莉乃さん 熊本県立大学 2月15日～3月19日 5日間のインターンシップ)

☆2022 (令和4) 年度賛助会員募集中! ☆

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団では賛助会員を募集しています。当事業団の活動にご理解とご支援をいただくと共に、さらなる国際交流や国際協力の輪が広がることを願っています。

会員の方々には、当事業団の機関誌『ニュースレターくまもと』の送付や様々な情報の提供をさせていただきます。

- ①個人会員 一口 2,000円/年(一口以上) ②団体会員 一口 10,000円/年(一口以上)

私たち、熊本市の国際交流を応援しています。

阿蘇医療センター、一般社団法人熊本市医師会、一般社団法人熊本市造園建設業協会、学校法人君が淵学園崇城大学、株式会社セイラグロース、熊本県行政書士会、熊本赤十字病院、熊本市独協会、熊本市米協会、熊本保健科学大学、熊本労災病院、国保水俣市立病院総合医療センター、国立病院機構熊本医療センター、社会医療法人寿量会熊本機能病院、社会福祉法人恩賜財団済生会熊本病院

(2022年3月31日までにご加入いただいた団体の皆様) 50音順 (敬称略)



一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

住所：熊本市中央区花畑町4番18号

熊本市国際交流協会

休館日：第2・第4月曜日、年末年始(12月29日～1月3日)

TEL：096-359-2121

FAX：096-359-5783

E-mail：pj-info@kumamoto-if.or.jp

URL：https://www.kumamoto-if.or.jp

